

1.【担当者自己紹介】

石井 拓洋 (いしい たくよう)

ishii05042@venus.joshibi.jp

専門：音楽文化学研究、映画音楽研究、米国音楽文化研究、作曲。

2.【研究的視点の必要性】

- 「現状から問題点を見い出す」こと。「意義のある問題意識」を。
- 意義のある問題意識を得るには？
 - ・ 世界を深く知る（歴史を知る、文化を知る、思想を知る、作品を知る、、、）
 - ・ 先人たちの問題意識を知る（作家、思想家、研究者、、）
 - ・ 多様な「物事の見方」を知る（『視点の可能性を探る』）
- とにかく、事実に基づいた「インプット」（知識の取得）が必要。安易に自らの独創的見解に逃げない。

3.【なぜ「記号論」か？】

- 「物事の見方」の一つとしての「記号論」 semiology
- 記号 (sign) とは、視覚や聴覚を伴うものによって、何らかの対象を示すもの
- 記号論の前提 = 「言語」と、その「指示対象」には必然的なつながりはない
- 記号 (言語) は、そもそも、形・色・音などでしかない。本質的・普遍の意味は内在しない。

- (なぜ記号が意味を持ち始めるのか?)

- 記号の意味は文化や社会の中で創り出される (コード)
- 私たちの「インタラクティブ」な営みから創られる
- 「たまたま」な繋がりだけに、自由な意味生成の可能性あり
- ここに「表現」と「意味」をつなぐ関係が生まれる
- 「表現」の意義を考えるために「記号論」は有効である

- むしろ「記号 (言語) が対象の認識や意味をつくる」という視点

- 人間は言葉によって世界が認識をつくる
- 日本では虹は7色 (赤、橙、黄、緑、青、藍、紫)、しかし、、、

web「豆知識：虹の七色」

<http://www.geocities.jp/yunakisaragi/index-00-frame-on-hanagoyomi-19-51.html>

- 「言語論的転回」= 20 世紀における人文科学上最大のパラダイム・シフト。

- 「対象を示すため」に言語が在るのではなく、「言語が在る」から対象の認識と意味がつくられる

- あらたな「記号」は、あらたな「意味」を作る。記号 (言語) が意味を作り、いずれ文化をつくる

- ここに「表現」の自由や意義を見い出すヒントあり

- 「表現行為」の根幹となる「記号」と「意味」を、人間社会のインタラクティブな営みから探ることで

あらためて「アート」の在り方について考えてみたい。各自の研究的視点をえる一助となれば幸い。

■ 輪読使用テキスト (前期)

池上嘉彦 『記号論への招待』 東京：岩波書店、1984 年、(岩波新書 258)。